

新編水滸畫傳

四編

壹

21
875
31



新譯水滸画傳四編總目錄

前帙五卷第三十四回第三十八回小い

明治三十二年十月十日購

卷之三拾壹

鎮三山大に青州道を開け
霹靂火夜瓦礫場を走

卷之三拾貳

石將軍村店に書を寄
小李廣梁山に雁を射



卷之三拾三

梁山泊に吳用戴宗を奉
揭陽嶺に宋江李俊小逢

卷之三拾四

没遮欄及時雨を追趕
船火兒夜尋陽江を開け

門 875 卷 31

新編水滸畫傳卷之三十一

小の松八

卷之三拾五

及時雨きよたけ神行しんぎやう大保おほほり小會こかい浪なみ
黒旋風くろせんぷう浪裡なみのうち白跳しろとびと闘たたかふ

後帙こうし五卷ごくわん第三十九回だいじゅうきゅうかい第四十五回だいごじゅうごかい

卷之三拾六

潯陽樓そんやうろう小こ宋江そうかう反詩はんしを吟ぎんむ
梁山泊りやうざんぱく戴宗たいしゆう小こ假信かりしんを傳つたへしむ

其下そのげ

梁山泊りやうざんぱくの好漢こうかん法場はうじやうを劫あはは

白龍廟はくりゆうびやう小こ英雄えいゆう小こ義ぎ小こ聚あつまる

宋江そうかう智ちをとりてく垂たげぬる軍を取とる

張順ちやうじゆん黃文炳わうぶんぺいを活捉くわくとつ

卷之三拾八

還道村えんどうむら中なかつて三卷さんくわんの天書てんしよを受うけ

宋公明そうこうめい九天くわんてん玄女げんぢよ小こ遇あは

假李逵かりらぢの剪徑せんてい單人だんじんを劫あはは

黒旋風くろせんぷう沂嶺いれい中なかつて四よの虎こを殺ころす

錦豹子きんぱうし小徑せうてい中なかつて戴宗たいしゆう小逢あひふ

病関索びやうせきざく長街ちやうがい中なかつて石秀せきしゆう小遇あひふ

揚雄やうゆう醉すいて潘巧雲はんせううんを罵ののしる

石秀せきしゆう智ちをとりてく裴如海はいにょかいを殺ころす

卷之三拾九

卷之四拾

新編水滸畫傳卷之三拾壹

東武 高井蘭山翁 譯編

○鎮三山大あゑんさん大おほい青州道せうしやうどうをまか鬧なは

宋江すやうけいハ不慮ふりよ小清風寨せいのふうざいの正ただ知寨ちざい劉高りうかうがて多おほ活捕くわくほれきり小李せうり廣くわう花か采さいも
黄信わうしんが計けいゆき酒宴しゆえんの席せきは活捕くわくほられせうしやう青州せうしやう小送せうそう人ひと為な西人せいじんを囚車しゆじん小
入いれ百餘ひやくじゆ人の軍士ぐんしを催もよほし鎮三山ちんさんさん黄信わうしん劉知寨りうちざいせせ小清風寨せいのふうざい城じやう獲とれ
青州せうしやう路ぢを望のぞんでおほ三四十里さんじゆしりを馳は乃な前まへ面めんをみるおほ大おほひおほ林りんあり林りんの
内うち小せう人じんあひつひ只ただ影かげ窺のぞひ望のぞまれおほ緒いとの軍士ぐんしこれを怕おそれおほ乃なち立た住す林りんの
内うちを指さぎひくひ云い々々々々惟ただりおほ林りん中ちゆう小せう人じん在あるおほ再また三さん我われをみるおほ必かな定ぢやう
盜賊たうさくならぬおほあらむおほ何なにをみるおほこれを追退おひけんおほやおほ流なが皆みな進しんまおほ進しんまおほ進しんまおほ
おおへおりお黄信わうしん此こゝ光景くわうけいをみておほ供たての軍卒ぐんそく等らを責あておほ云い波なみ等ら何なにぞ

かくのどく人を怕るや必も遲疑を休て進発せむと南先小進んで死
なれば軍士らも黄信が威勢に倚る。二ツ囚車を擡大勢是を打圍で
一齊に咄と進みたり。既中々林の辺にあり。処に俄に金鼓の声大に
響きし。諸の軍士どもこれをぞと驚れ慄き急ぎ逃去んとせし。処に
黄信怒り云々。汝も危軍何ゆゑ斯く自ら頻りに恐懼もや。只
宜しく列を堅固に備へて進出べし。少くも存懐をなすこととて。又
劉知寨に向き云々。足下は諸軍と共に囚車を後へより進
む。我ハ試み敢て為先走し。劉高ハ金鼓の声に驚ひて魂魄已に
散るれば敢て返答せし及む。只口の内に再三再四念じて。大慈
大悲の観音菩薩。救へ此道を恙なく過らしめんとて。後を雙の
手中に挟み只合掌して観念し。面の色ハ恰も土のどくあり。黄信は

有名の豪傑也。兵馬都監の勤をなせば。少くも怯る事なかり。馬を躍せ劍を撚り。南先小進する処に林の内より五六百の小賊ども。喊き叫んで斬り出各頭。赤紅巾を巻身中。皂服を着し。腰中を利劍を掛。長鎗を持。我弟と先を争ひ。一齊に咄と進出。其の内に三人の大王馬を並べ。南先も進む。一人の大王ハ青色の袍を巻。一人の大王ハ緑色の袍を巻。一人の大王ハ紅き色の袍を巻。各段々銷金の糸字中を戴。腰に皮鞘の腰刀を帯。少の明晃とせし。朴刀を提げ。三人同く路も窄し。馬を進めて。鬼より来る。是則錦毛虎燕順。矮脚虎王英。白面郎君。鄭天壽の三隊領。二陣已に相對し。三人の大王ハ高声を呼り。今此より。官軍ハ何國より来る。ぬるる。あはれ。林ども。若此道は

過らんと思ひ速小三千貫を出し路を買て過す。然らば我肯く
汝らを饒せん。黄信馬上在て此言を言。大に怒く云。汝は汝は
必も無礼をなれと云。我を誰と云。汝らも我名を言。我を
久しうん我の青州の都監鎮三山之汝は誤く我が猛威を犯す。
後悔立処ふ。三人の大王此一言を言。大に怒り。則ち
眼を睜開く。唾罵て云。汝は何鎮三山とや。云。賊官よ。於
後ひ鎮萬山中せよ。三千貫の買路錢を償はむん。我決す。
汝を饒せま。只速小路を買馬を下りて通す。倘然らむんば。
三千貫の替り。汝が首を死す。黄信これを言。怒り
骨髓を徹り。再び大音声を揚ぐ。罵り。汝は奸賊。やんぞ
敢く自ら死を求んと。我もこれ官司の命を奉つ。

死罪人を州裡に送る。朝廷の役人なる。何ぞ官路を汝らに
挿らむ。三千貫を出さん。汝若命惜く。速小流を引て山
飯れ。三人の大王。敢も大に冷笑て云。汝は公用を言。
権威を震えんと。恐る。遠路を。人者。誰か敢て三千
貫を遺さん。假如天子の御駕を移し。三千貫の買路
錢ハ是非これを求む。況や汝らをや。汝り。今三千貫の買路錢を
携へむん。其質とく。罪人を山陣に預け置け。君汝何事の日
ても。三千貫。持泰。我肯く。罪人を還す。黄信大に
怒り罵て云。汝死を招く強賊。いんぞ朝廷を軽ん。下て。我を
云。我が喪門劍の利害を汝らに知らせん。諸の軍士。下知
しく。金鼓。齊しく。鳴り。め。馬を拍劍を舞。直ち。



鄭元昌

西

英



鎮三山
青州
道
關

燕順ホ三人ハ斬ク蒐リなれバ。三人の既成も同トク刀を揮ク相迎へ
 遂ニ鋒と交ヘク戦ヒ己ハ三十餘合不及ビ一死ス。黄信三人の豪傑ハ
 一人ハ敵一ゴク力漸衰ヘぬ。况ヤ劉高ハ本支官位コトナレタ。
 黄信を助け戦せんといふを置先此光景を以テ大ニ驚キ只逃走を
 の欲レバ黄信心中ハ怒ル敵ハ三人我ハ一人ハ勝を以テ
 伯人若彼らハ活捉レバ是乃チ一生の恥辱トス。且誓ク此を
 脱ス。再ビ計を施さんと思業を決シ忽チ馬を回シテ逃ス。
 三人の既成勢ハ衆トシ趕ナレども。黄信多ク跡をも顧ビ只馬を飛
 々ク清風寨へ馳回リぬ。諸の軍士ども。黄信ガ逃スを以テ大ニ
 潰乱ス。遂ニ囚車を乗四面八方ハ散失ス。此時劉高ハ行を消シ
 魂を落シ。忙シク馬ハ策うち。逃回ラんとセ。附小賊ハ頼ク地上に

鈎索を引劉高ガ馬を鈎倒シなれバ劉高真倒シ地ニ落ケル処を
 救百の小賊一度ハ前デ劉高を捉ヘ又宋江ガ囚車を打開テ宋江を
 扶け出シなれバ花榮ハ自ら囚車を踢破リテ跳出ス。小賊の索尽ク
 聲刺刺ト断ヌ。諸の小賊ども劉高ガ衣裳を剥キテ宋江に
 送セ。元皆劉高を大ニ罵テ緊ク言フ小賊ハ解メぬ。三人ハ
 既領ハ宋江花榮を待テ馬ハ乗リ。遂ニ同トク劉高を監押
 シ山陣ハ破リ。此日三人の既成此処ニ宋江花榮兩人救
 ヒ。所以ハ此の如ク。向ハ上元の夜小賊ハ許多を清風寨ハ
 花燈を吐觀シ。小賊ハ幸ヒ其夜宋江ガ活捕レタを見
 届ケ。急ニ馳回リテ既領ハ報ト告テ。急皆大ニ驚キ。速物列
 々小賊四五人擇出シ。清風寨ハ置毎日宋江ガ事ヲ規メ。

消息を求め、此日宋江花榮兩人の者果、青州府を送るを
 預め、此処出張し、遂に官軍を追拂、兩人を救ひ、三人の
 隊領を夜宋江花榮と共に、山陣あり、二更の時分、
 燕順も聚義廳に於て、酒宴を設け、乃ち宋江花榮を待て、
 客座に坐せしめ、三人の隊領の主席の座を列ね、大に飲酒を催て、
 宋江花榮を款待、山川の珍物品を尽し、豊あり。花榮先燕順ホ
 三人の隊領に、謝す云、今日三隊領宋押司と某と、命を救ひ
 め、仇人を活捕せしめ、某らが為す洪大の福に、誠は何を
 思ふ。此恩を報ぜんや。某今宋押司と共、此山陣に逗留し、身を
 躱さば、始終恙なく、寸心を安んずるに足べし。然れも某が弟の上
 の尚一ツの有りて、未だ全く心を安んぜざらん。燕順が云、知寨も

何の心腑を悩め、あや、早くハ速に心を語、某等知れ、
 若某ら力を用ひ、なごき、人の鞭ひのり、難事なりと、敢て辞
 捨て、下を扶く、これを扶くべし。花榮が云、某猶妻と妹とを清風寨の内、
 捨置られ、必定黄信が活捕す。若然らば、我のんをよ、独心を安ん
 せんや。燕順が云、知寨必もこれを憂ひ、われ我熱、これを想ふに、
 黄信敢て夫人を生捉てあり。假令活捉、州裡に送るとも、必も
 此辺の路を過るべされ、某ら三人、これを奪ひ、去り、知寨の与へ、あ
 らま、乃ち一人の小賊を山下に、先消息を伺せ、われ、
 花榮大にこれを感謝せり。宋江此時三隊領に耐し、云、け、
 賢弟、我を先劉高を引出させ、燕順が云、劉高、今廳の
 柱に、柵に置られ、速に、を殺して、長兄の、仇を雪ぐべし。

花榮が云彼を殺さん。我らも下を留各も宜く一覽せしれ。頼と元皆席を立く柱の辺にあり。而も宋江先劉高を指ぎ。大小罵て云汝と我とを原来仇もかく寛もなれ。いんぞ全く悪妻が言を信し。我を害せんと図りしぞや。今かく擄となり。一々の天の責め。罰なり。汝於此上中も分説あり。如花榮が云彼がどれ悪人。小對して言語も汚し。長兄宜しく問答を休め。我急小これを殺して。尊覧小使へんと。乃ち明晃々たる力を用く。劉高が胸を刺開。頼と肝を拽出。宋江の前。獻られた。小賊ども遂小屍を把て。傍小拖搬。乃ち宋江をえと云。今日三陽の力に依く。此悪人を殺し。我らも彼悪婦を殺さる。ハ遺憾あり。王英戯れて云。我明日清風寨小就彼女を

捉へ回さる。這回ハ我小与へる樂しめ。各一笑を催り。翌日まも五人の豪傑聚義廳小會合。急小清風寨を撃んと。商儀。今日ハ先彼らを歌。明日小山を下て。清風寨を攻。疲れ。今日ハ先彼らを歌。明日小山を下て。清風寨を攻。とも。我未だ。唯。列位の名。宋江此後を。燕賢弟の言。究之可。先宜しく人馬を歌。氣力を培。軍を登。一戦。必。戦ひ。小利。急小山前。山後。觸。ま。人馬の氣力を養。山中。残。觸。を。廻。都。監。黃。信。一。騎。馳。小。清。風。寨。小。跑。回。り。忙。小。寨。中。の。兵。を。催。小。緊。小。四。方。の。柵。門。を。守。り。願。小。一。封。の。文。書。を。修。へ。て。人。を。青。州。小。張。府。尹。へ。か。く。と。訟。へ。る。府。尹。大。小。驚。き。先。文。書。を。

今清風山の盜賊らと同一く山陣やまじんに在りて清風寨を犯さんと欲ふ意あり。賊あつの急きんに推寄おしよりて清風寨必定保ち難たがく。人事にんじ已まはれ急きんに及およぶ。良將りやうしやうを遣つかひて清風寨を堅固けんこにす。しるを遣つかひて。府尹ふりいんこれを見畢まる。益えき驚おどろ懼おそし。速すみに人を遣つかひて青州しやうしやうに指揮使しきひし從兵じゆへい管兵馬くわんべいば秦統制しんとうせいを請まる。軍情ぐんじやうの重ぢゆうきを商議しやうぎす。とて頓とんて使者しやを遣つかひて。秦統制しんとうせいハ原山げんざん後ご開州かいしゅうの人ひとに。姓しやうハ秦しん名なハ明めいと号ごうひ。此人このひと甚たと短氣たんき急性きやくせう中ちゆう。怒いかる声こゑハ雷らいの轟とどろく。人皆みな譁あや名なを徹てつく。霹靂へきれき火か秦明しんめいと呼よぶ。先祖せんぞハ夷ひに似にたり。ゆゑ人皆みな譁あや名なを徹てつく。乃すなはち軍官ぐんくわんを遣つかひて。人ひと之の此この秦明しんめいよく一條いっじやうの狼牙らうが棒ぼうを使つかひて。萬夫まんぷ不當ふたうの勇ゆうあり。此日このひ秦明しんめい府尹ふりいんの招まき。直ちやくに府尹ふりいんの衙やに馳ち至しり。彼か慕容もくじゆ府尹ふりいん急きんに迎むかへ對面たいめんす。乃すなはち黃信わうしんを遣つかひて。文書ぶんしよを

出でて。せり。秦明しんめいを遣つかひて。大おほに怒いかり。盜賊たうざいハ分ぶんとて。いりんとかく。吾われれをわびや。相公さうくわう必かなむ夏なつ愛あいひありとわかれ。某か急きんに人ひとを遣つかひて。賊あつを。若し彼か賊あつハを活捉くわくせつせん。誓ちかす。再び相公さうくわう見まえ。慕容もくじゆ府尹ふりいん云いふ。將軍かんとあつ。此このを。力ちからを用もちひ。後ごに賊勢ざいせい幾いく千万せんまんありとも。何なんぞ。何なんぞ。何なんぞ。不足ふそくんや。おれを。將軍かんと急きんに兵へいを起たり。賊あつ先清風寨せんしやうふうざいを撃うつ。人ひと宜よろしく速すみに人馬にんばを催もす。秦明しんめい云いふ。此このを。遅延ちぜんに及およぶ。今宵こんしやうの向むかひに軍馬ぐんばを催もす。明日あしたハ。府尹ふりいん是こゝを遣つかひて。大おほに悦よろこび。預より。兵糧へいりやうの用意よういを。秦明しんめいハ文書ぶんしよを遣つかひて。花榮けいらうが朝廷てうていに背そむく。盜賊たうざいハ。一ひと。府尹ふりいんを辭しす。一ひと。怒いかる。頭あたまより起たり。頭髮くわつぱう倒たふす。豎たてに。府尹ふりいんを辭しす。馬うま無な直ちやくに指揮司しきひしの内うち來きて。一ひと百ひやくの馬軍うまぐんと。四よ百ひやくの步軍ふぐんを催もす。

先城外を撃つ。勢揃へをあしめられ。此時慕容府尹先達て城外にあり。多く酒肉を調へ。三軍に賞し。今朝秦明も声花を披掛。已に城外に打出人馬を嚴小備へ。大文字に兵馬總管秦統制と分明に書く。紅の大旗を當先小持せ。秦明ハ中軍に居し。白馬小衆已に三軍を起し。打立んとせ。処に府尹自ら秦明を呼ば馬を下さめ。先出陣の吉兆を祝せ。んばささる。酒宴を具へ。盃を奉。再三秦明を勸め。云々。將軍宜しく三盃を酌せ。出陣し。凱歌を奏て。敵陣し。之を秦明これを謝し。酒を酌了。遂に慕容府尹を辭し。再び馬小衆隊伍を嚴密に閑く。三軍を催促し。直ち清風寨に望み。馳行し。

○霹靂火秦明夜瓦煖場小走

秦明已に打立て。大勢の軍馬を領し。清風寨より。西氏とく。秦明も威風凡あり。さるを令く。連無双の勇將ぞや。各褒賞せ。さる。清風寨と云ハ青州の東南に在る。清風山と云ハ尤遠り。清風軍を引て。清風寨の山南より進み。直ち清風山に下り。小賊どもこれを見。急し。山の上り。諸隊領。小走。此れを告ぐ。諸隊領ハ豫く中人を兵を發し。清風寨を打ん用意せ。秦明先人を率し。逆寄し。列位大驚。さる。計を以て。これに処せんと。各面を合を計し。此時小李家花榮。元ぬき。んで。列位十分驚き。さる。之。の語。も兵臨で急を告ぐ。必も須く死敵と云。とある。何の遲疑も。わら。只速に山兵。小飽。酒食を吃。其。を後へ先戦に力を以てし。

後彼を敗る不智を用也。一。其計ハかくのどくかくれどくと低言ヲレバ。宋江此後も同意。賢才の奇謀固小當つて是も宜しく事ハ必
多し。宋江花榮預じり謀策を定め乃ち山中を後小觸く已小
人馬をそろへり。花榮を如く一疋の良馬を擇。其外盛甲弓箭鎗
等をあつて軍勢の勢を相待ぬ。又秦明ハ元を従へ此より清風
山の下より十里を隔く陣を取翌日五更の頃軍勢に食せしめ一ツの
大炮を放く。一時小鯨波の勢を吐と奔。清風山はあり要害此
地をえ立て軍を備へ金鼓熾ん小打鳴は響音天地も震ふを
なり。清風山も又金を鳴。鼓を撃。関の声山谷小響せ。一彪の人
簾をさして弛下。此時秦明を勒へ狼牙棒を横へ敵の勢ひを
伺ふ。諸の小賊ら小李廣花榮を中央小引つ。各勇を逞く。我

劣らどと弛進む花榮已小麓迄下り。諸軍小鎗を鳴。遂小敵陣
相對。双方関を合せ暫く乱声止ざり。時は花榮鎗を論。一。を
陣前小馳寄秦明小對。恭。一。礼を移ひ。これを秦明もをん
大不怒り。花榮は本将門の子孫あり。今知寨の職とて一境の
地と堂小握。緑を食。何の之。犯。盗賊と合射。朝廷に
背く。我今上命を奉つ。汝を捉へん。此所小向。汝速。小
下。束縛を受。却。脚を汚。の羞辱を免。一。
量。匹夫。幾千石の賊兵を引来。のん。我
天兵。敬。今日を省。死を朝家。順。花榮
これ。言を下。願。総管某。分説。某
某。敢。朝廷。背。只彼劉高。故。私の仇。以て世成



新編水滸傳卷之三十一



秦明
典
花榮
大戰

新編水滸傳卷之三十一

遍らま家あれども回りぐるく國あれせ入がとしか多ゆへ不控らく此山に
 入て難を避災を遁れんと欲の仰冀く総管明察あつて某が逆
 臣の汚名を再び浄りしめ入秦明が云汝れ自ら捉れ不就はか
 巧言を吐く他を痛惑んとすや我今汝を生擒朝家一人の逆臣を
 除くべしと左右の命と金鼓齊しく鳴さしめ狼牙棒を揮く
 花榮を望み撃ちて蒐る花榮ハ却て呵々と打咲ひ罵てしめ秦明
 汝ハ眼ありあがる善人を威徳は劉高ぞと此悪人を羽翼く汝今皇
 帝の命を奉て来りし官人なれをこそ我多く言を卑かしく敬ひ
 しに汝ハ誤て我が怖を奪く敬を思へり我今汝ハ一棒を与へ魂を
 消しんに必ぎ一歩も逃さてあられを捧を輪しるを躍せて相迎へ
 汝於清風山の下小在る戦を交へ一往一来勇を奮く恰も南山れ

猛虎北海の蒼竜ともの勢ひを比べ闘ふ異あつた龍怒れば頭
 角嶢嶢虎戦を死ハ爪牙躍閃敵ハ一對の敵方方適の勇將ぞと
 兩軍鳴を静め見物しと汗を握り勝敗を伺ふ已ハ平戦五六十
 合よ及びが更子贏輸くべ時花榮故意を回し山下の小路を
 望んで逃走し秦明怒り汝何國の地志きぞとて後ハ後ハ忙
 かく追来る花榮牙固を窺ひ急小棒を甲の上纏り挿左の手に
 弓を拈右のふふ箭を抜き打格へく満月のごとく拽く切て放せ
 牙箭のさす秦明が盈の頂中つて頭腦ハ穿れとて一とバ秦明
 大ハ驚き速に馬を回し引退き未ど暫もせざる再び又追撃
 せんと衆軍を進め跳来りし小賊ハ尽く山陣ハ引回ししは
 花榮も又徑路あり山ハ上りしを秦明これををく大ハ怒り乃兵よ

下知を傳へてのぞく盜賊ハ今我ガ兵ハ敵ハ戦んを尤これを惡む。若今日此山陣を踏破らばさう何れの日を期せん。兗軍力を併せ山上に攻よとて身當先蒐たれば。諸軍大膽の勇ハ倚る。切のく勢ハを増し力を扶け金鼓一齊ハ打て。一同ハ鯨波の声をあげ。山をさりと攻上り。段々ハ二所三所の山を繞り。生野ハ喚き叫び。此山の上より一時ハ楠木砲石を雨のぞく打下し。れば官軍忽ち途を失ひ。木石ハ中で死も者五六人ハあり。これあつて進退さるる谷り。諸軍漸々山を下り。再び引退をせ。秦明ハ原来短氣急性の生質。されハ大ハ怒り。くさるる忍ぶ。勝ハ復々を求て山を上り。賊徒一人ハ悔さず。都々破々。皆軍我ハ力ハ負ひ。再び兵を引く山を繞り。彼よ此ををを。西山の辺ハ

鼓の聲大ハ響き。林の中より一對の紅旗閃き。秦明ハ急ハ兵を引く。純向ひ。処ハ金鼓の聲も忽ち止。紅旗も亦見え。ありぬ。秦明此処の路を。都々樵夫ハ往來も。砍柴路。唯一筋ハ大路あり。況や此辺の路ハ。乱木乱石を交。路口を塞たれむ。さうに上。秦明三軍に下知して。路口ハ木石を取。の道を閉んとせ。処ハ一人の哨者來。秦明へ。云。東山の辺ハ金鼓の聲大キ。一彪の兵ハ紅旗を閃。純出ぬ。秦明是を。急ハ兵を引。東山に。賊を一人も漏さず。討取と下知して。四下を顧。金鼓も鳴。紅旗も。秦明又三軍を卒。四面八方を搜。繞。此邊。幾筋の砍柴路あり。是又多ク木石を乱。通路

塞あり。から処又一人の細作の兵来り西山の辺又金鼓を鳴り
 紅旗の兵如きなり。秦明もあむを再び鞭を揚るを跳せ。西山北
 辺に跑来り。乃ち諸軍と俱に此処をる。又紅旗もいへば
 一への敵兵もあむ。秦明ハ元来短氣急性の大將あれば。敵兵の又
 さると憤り。牙を咬齒を切て。悲れる。兩眼日光のどうある。又東山北
 辺に金鼓の鳴る大に起り。万千の軍の一齊に進む勢ひ。又秦明
 限なく怒り。此回こそ必定賊らが隠れをを索め。一くを討
 べし。諸勢の力を竭せと下知を傳へ。又もるの疆を扯回して
 東西へ馳走り四方を跑虎く。山兵を殺れども。賊兵も紅旗もさす
 影も形もあむ。秦明も怒り。怒りも勝せしと云好し。速莫
 我今道を求め。山上の終に強賊らを活捉んものをも。又三軍を

二も分此うと。路と終のあり。処に西山の辺に又人馬の音もさす。
 秦明ハ怒り。列士も又もる。策も西山に。遍く四方八面を搜して。
 賊兵を需れ。只一人の影もあむ。秦明今自ら大に吼り。忙しく
 兵を下知し。乱木乱石も引退さ。及まば直ちを踏越く。せひ
 山の上とせ。処に一人の兵進む。此辺の路ハ都て樵夫が
 往来も。徑路も。山障へ。通も。況や木石多く。交へ積り路
 口を塞ぎ。恐れ。此を越んと難か。然らば。功あり。只東南の方を
 一筋の大路あり。と。及び。宜しく
 彼所より攻より。若し。顧此処より。上らんとせば。か。秦明ハ
 べし。秦明ハ云。東南の方。若果。今宵の。諸軍を
 引く。進。遂に諸軍を引く。東南の方。馳来れ。は

新編水滸書傳卷之三十一

紅日も西に傾き、晚不及んと人言齊しく大に疲れ。やうやく山下に
 あり。方陣を多く一、同食をせんとなす。山の上の火把乱れ起り、金
 鼓乱し、響き、関の声、天を震ひ、砲の音、地を動し、秦明も之を
 知り、ゆがむ。大に怒り、自ら四五十騎を引く。山に跑り、残り半里許り
 馳る。処、林の内より、乱箭雨のごとく射出。官軍忽ち五六騎、箭
 中てるより、真倒れ、落く死せり。らふ於て、諸勢をくく、秦明も
 止るをゆがむ。再び山の下へ引退。諸軍も之を、飯を吃し、まさき火を
 処、山の上へ又八九十の火把、一連に揮照し、馳下る。軍勢あり、秦明急
 兵を引く。相迎んとせれば、火把を、一時滅く。存しく、静り、何れ
 音もあらず。夜、八月、月光あり。陰雲、小速り、掩る。唯、朦々、朧々と
 十分、明らう。秦明、此光景を、怒り、甚しく、諸軍、下知

火炬を、照させ、樹木を、尽く、焼拂はせんとす。俄、山の上、鼓笛の、声
 大に、響く。秦明、之を進め、又も、山を、馳、乃、頭を、擡げ、山の、頂を、見れば、
 二十四五の、火把を、照し、宋江、悠然と、酒を、飲、あり。花、菜、又、安、と、傍に、
 陪侍し、酒を、酌り、秦明、此、射を、見、忽、然と、怒り、骨、髓、を、徹し、
 する、山下、大、音、声、を、呼、び、罵、り、只、顧、悪、口、を、吐、け、処、花、菜、呵、と、大、に、
 笑、て、答、へ、く、秦、統、制、汝、再、三、喪、益、の、怒、を、起、さん、より、先、本、陣、に、
 廻り、自ら、保養、を、加、へ、宜、しく、氣、力、を、堅、固、ゆ、く。明日、の、集、會、を、待、
 毎日、今日、のご、と、く、費、骨、折、し、めん、も、不、便、な、れ、明日、は、我、決、し、汝、が、
 心、高、の上、に、三、百、の、明、窓、を、開、べ、き、と、汝、が、一、命、ハ、只、今、宵、を、保、ん、ど、
 廻り、酒、宴、を、設、け、冥、途、の、旅、出、苗、別、の、三、軍、を、聚、め、宜、しく、飲、酌、を、
 催、せ、と、云、ふ。羅、ら、ん、を、放、つ、と、絶、倒、す。秦、明、之、を、望、み、て、肝、を、

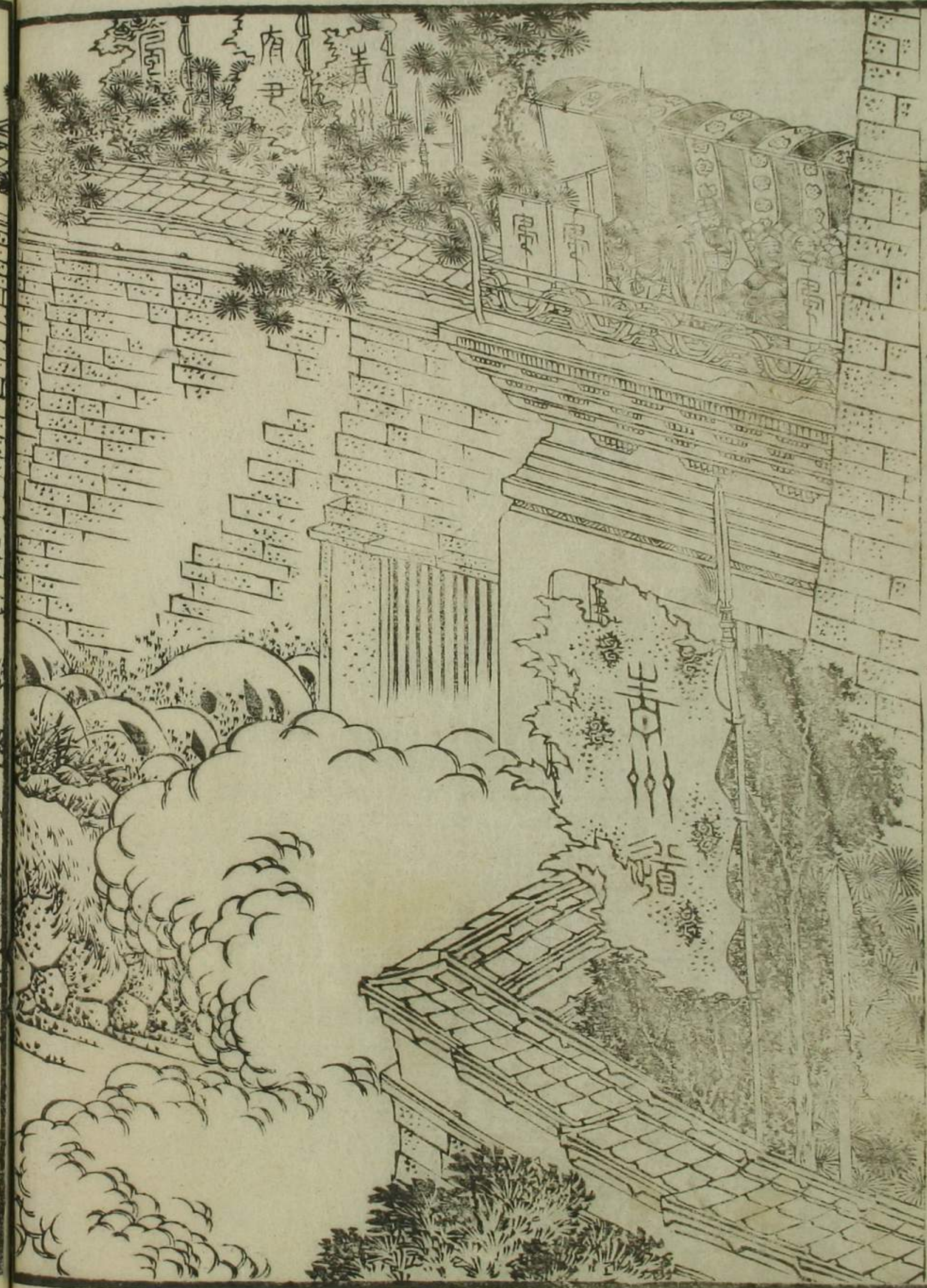
咬^く兩眼^{りやうがん}を睜^{みひら}開^くき恰^{あつ}も奔雷^{かんのら}のごとく吼^{こゝろ}り喚^{まう}て云^いるハ花榮^{かえい}汝^{なんぢ}敢^あて
 かのどく我^{われ}を欺^{あそ}むや汝^{なんぢ}のよく我^{われ}が曾^{まへ}の上^{うへ}の三百^{さんひゃく}の明窓^{めいそう}を閉^あんと
 ぬ^ぬ何^{なに}ぞ必^{かなら}ず明日^{あした}を待^{まち}んや宜^{よろ}しく今^{いま}あ^まく山^{やま}を下^{くだ}る雌雄^{しゆうじゆう}を決^き
 せよ汝^{なんぢ}を我^{われ}を恐^{おそ}れ^{おそ}る山^{やま}を下^{くだ}らんば汝^{なんぢ}が先祖^{せんぞ}の武名^{ぶな}此時^{このとき}も勇^{ゆう}
 穢^せふも花榮^{かえい}冷笑^{れいごう}て汝^{なんぢ}今日^{けふ}東山^{とうざん}を走^まり西山^{せいざん}を走^ませ喚^ま身^み解^げも
 疲^{つか}れん我^{われ}能^よく今^{いま}汝^{なんぢ}を殺^{ころ}すも疲^{つか}れん若^も小勝^{せうしやう}かバ聊^{さう}功名^{こうめい}とを求^{もと}
 足^{たり}らぬ人を食^くふ悪^{あく}も覺^{おぼ}るも誰^{たれ}策^{さく}ぞん汝^{なんぢ}疾^{はや}回^まり明日^{あした}死^し今^{いま}宵^よ
 我^{われ}汝^{なんぢ}が一死^{いつし}を饒^あし明日^{あした}まで命^{いのち}を慍^いふ形^{かたち}も秦^{しん}明^{めい}此^{この}言^{ことば}を以^もて益^{えき}大^{だい}に
 狂^{くる}ひ只^{ただ}顧^{かへ}山下^{やまのした}に在^ある唾^{つよ}をき^き罵^{のの}り已^ま路^ぢを尋^{たづ}ね^ねの跑^は上^{のぼ}るとぞた
 又^{また}暗^{くら}く花榮^{かえい}が弓^{ゆみ}箭^やの術^{じゆつ}細^こくふ怖^{おそ}れ只^{ただ}山坡^{やまのさか}の下^{した}よるを勸^{すす}め^め再三^{さんさん}
 惡^{あく}口^{くち}を^を忽^{たち}ち親^{おや}方^{かた}の諸^{しよ}軍^{ぐん}大^{だい}に噪^な動^{どう}し^しれハ秦^{しん}明^{めい}急^{いそ}むる

回^{くわい}してこれを^を山^{やま}の上^{うへ}より火^ひ炮^{ぱう}火^ひ箭^や煙^{えん}を飛^たせ雨^{あめ}のごとく打^{うち}つけ又^{また}
 背^せ後^ごの方^{かた}中^{ちゆう}に三^{さん}四^し十^{じゆう}の小^{せう}賊^{ぞく}一^{いつ}処^{ところ}の群^{ぐん}也^{なり}弓^{ゆみ}弩^こ齊^{せい}しく發^はして散^{さん}く
 射^{しや}る官^{くわん}軍^{ぐん}大^{だい}に亂^{らん}れ悉^{しつ}く皆^{みな}鋒^{ほう}を倒^たちて走^まる山^{やま}の傍^{はた}
 深^{ふか}坑^かの内^{うち}に身^みを懸^かれて這^こむ命^{いのち}を脱^だれぬ此時^{このとき}已^ま三更^{さんげう}の前^{まへ}後^ごあり
 諸^{しよ}の軍^{ぐん}馬^ば弓^{ゆみ}箭^や拏^な坑^かの内^{うち}に避^かへ終^{つひ}に息^{いき}を續^{つづ}くとせ処^{ところ}坑^かの四^し方^{かた}
 より俄^{たち}に大^{だい}水^{すい}奔^{ほん}り逸^{いつ}系^{けい}坑^かの内^{うち}に滾^{ぐる}入^いる諸^{しよ}の人^{ひと}馬^ば尽^つく溪^{せき}の中^{ちゆう}に
 亂^{らん}れ入^い皆^{みな}命^{いのち}を免^まれんと欲^ほひ岸^きの上^{うへ}より者^{もの}廿^にハ又^{また}初^{はつ}く小^{せう}賊^{ぞく}
 たる小^{せう}鈎^{こう}索^{さく}小^{せう}纏^{ちん}れ^れと槍^{やり}と^となり溪^{せき}の内^{うち}に存^あり者^{もの}廿^にハ皆^{みな}水^{みづ}に淹^ひれ
 死^しなり此時^{このとき}秦^{しん}明^{めい}ハ怒^{いか}れ氣^き天^{てん}を衝^つく吼^{こゝろ}る声^{こゑ}地^ちを透^とり独^{ひとり}自^{より}く小^{せう}
 路^ろ小^{せう}倚^よくるを飛^たせ^せる処^{ところ}は燒^やけ四^し五^ご十^{じゆう}歩^ほ忽^{たち}ち人^{ひと}廿^にハ陷^{おち}坑^かの
 内^{うち}に真^ま倒^たれ落^お入^いるれ^れハ兩^{りやう}邊^{へん}の伏^{ふく}兵^{へい}一^{いつ}齊^{せい}に並^{なら}び起^たりつ小^{せう}鈎^{こう}索^{さく}を用^{もち}く



不
入
城

秦
明
中
謀



新編
乃清書
作卷三十一

秦明を搭住乃ち坑の内より扱上り衣甲を剥取。形くさるる小舟に
 柳々清風山小引回りぬ。這ら陥坑等。都々宋江と花栄とが計あり。昼の
 戦ふと小賊おを東西の両山小麓一置成ハ西山小金鼓を鳴し。秦明を
 誘引し。或ハ東山小紅旗を現し。秦明を偽引。かく敵を賺し。両山の
 間を数遍奔走せしめ。各々寄りの人々大に疲れ。遂に溪の内坑の中に
 懸れ。弓箭を避んとせし。又四方より水の流れし。五百の官兵過
 半を水小淹し。死せしめ。所餘百六七十人の官軍せし。とくく擒とあり。
 七八十足の良馬ハ皆奪ひ。山陣を牽り。小賊共秦明を引く。廳
 前ふり。花栄忙しく出迎へ。親自秦明が柳の索を解き。則ち
 廳上り扶け上り。身を翻し。拜をせぬ。秦明も忙しく。忙し
 礼を還し。云々。我ハ是擒とあり。若しれば。身を膝子切まれても

死せし。何ゆゑ却く我をおし。や。花栄恭しく跪く。山
 兵ホ都々貴賤をえ。能に誤て。總管の威を冒せり。船ハ
 罪を免し。と。頓て衣服を將。秦明も着き。わかれ。秦明深く
 謝し。又花栄に問ふ。清風山の主三人の誰ハ。我原来
 これを擒。恐し。只ち。第一位の椅子に坐し。あひぬ。豪傑も。是
 何等の人。や。花栄答く。彼豪傑ハ。鄆城縣あり。押司の職を
 なせし。宋江と云人あり。其次三人ハ。總管も亦これを擒。恐し。つん
 ぞ。則燕順王英。鄭天寿。秦明。云山陣の三傑ハ。先と云。とく
 我の是を擒。彼押司宋江と云。あひ。山東の及時雨宋公明
 と云人あり。や。宋江先急。答て。某乃宋公明と。若し。秦明。まも
 敢。忙しく下。と。云。押司の芳名を。と。ハ。恰も。雷の耳に

裏くどろろり。今日何の幸ひや。顔を観ると城に欣躍ふ
 堪じ。宋江も又忙しくおを還し。大札を移んとし。れども足不自由
 や。殊更難多ふ。秦明又問て云。押司ハ足痛めぬや。
 兄及び何をおを還し。及んや。あ。足痛めぬや。ハ疥瘡
 せぬ。宋江云。某が賤足を痛めぬ。良以あり。い。語り受けしん。とて
 鄆城縣中。閻婆惜を殺し。とて。前後の事。一。詳に
 語り。又向し。劉高は。搦れあ足を痛く。策れ。終。皮肉綻れ。今。痛
 疼止。劉高夫婦。不善の。具。これを告。秦明此を
 大。悔て云。某一方の。多。多。幸なき人。城
 悪。列位某が。過ちを宥。且。某ハ急。死。回。慕容府尹ハ

この。再び軍。商。燕。先五七日ハ山陣ハ。滯留。と。子。賊。命。牛。を。殺。一。を。宰。あ
 大。酒。宴。を。設。け。飲。酌。を。催。し。又。彼。活。捉。る。官。軍。中。多。く。酒
 肉。を。多。く。食。せ。り。此。時。秦。明。救。盃。の。酒。を。酌。奉。茶。一。く。身。を
 起。し。て。云。ハ。危。位。の。豪。傑。ゆ。一。肯。て。某。が。一。命。を。助。け。め。ん。と
 初。某。が。彼。衣。甲。の。軍。器。を。還。し。ひ。青。州。府。へ。回。ら。し。め
 ぬ。燕。順。云。總。管。の。言。差。り。總。管。率。五。百。の。兵。を。引。く。青。州
 城。を。打。出。す。今。敗。軍。及。ん。で。只。一。路。回。り。あ。ひ。か。バ。必。定。府。尹
 某。を。討。せ。し。ん。ま。づ。軍。一。く。山。陣。ハ。逗。留。し。て。尤。も。歌。め。あ。り。ん
 ぬ。足。ま。ど。れ。は。持。く。此。処。ハ。在。る。某。ら。と。心。を。合。せ。志。を。同。し。り
 ぬ。於。互。ハ。力。を。一。ツ。あ。り。當。世。の。賊。官。ら。が。民。を。刺。で。集。

ぬる不義の財を奪ひあぐ公にこれを分納し。共小浮生を樂バ
 彼大陣中苦ダ下小在之。羞辱を被んありハ移莫太に強あぐ。ゆ
 死くハ總管時を察し意を決し之。秦明を殺て忽ち廳を下て云
 々ハ其ハ是當朝大宋の臣かれバ死せし。又大宋の鬼とあぐ人死也
 朝廷某を奉あぐ。兵馬總管と爲し。統制使の職を爲し。ゆゆハ是
 則ち朝廷の聖恩はとあぐ某ゆんぞ此宋朝ハ背く山陣小苗らんや
 若列位これを惡く某を殺さんとあぐ。某樂甘んづく死に就
 べし。某列位小随順せんこと。決し之。兼允諾をまだ。望らくハ明らふ
 其を奉り之。花榮これを笑く。忙しき。秦明を扶け。再び廳上より
 乃ち坐をさぐ。云々ハ總管怒を想く。我ハ一とを笑く。某も又
 是朝廷の旧臣。孫之。然もども無実の罪を被く。世を逼られ。刃を

安立まぐきあるき。故已之を切せし。今此山陣小苗を由ち。乃ち法の
 豪傑と共小強盜の頭領とありぬ。皆一命を金ゆ。再び朝廷の
 聖恩を報く。以て新々先祖の家風を振んぐ。爲く總管已に心を
 決し。山陣小苗のあぐ。我ハ輩豈敢て再三苗ゆらんや。
 先心を寛げて酒を酌し。酒宴了りぬ。某速に衣甲を脱ぎ。還し。あ
 ちせんま。必む其意を安んづ。秦明ゆんぞ昔く心を安む。只
 頻り小回らん。とを乞ふ。花榮又も。總管昨日より多く。神我
 勞し。力を費し。あぐ。上ハ。無辛苦。ゆん。移れ。總管ハ。系強勇の
 大将。あれバ。十分のこともあぐ。ま。ト。これ。只痛む。く。ハ。彼。一日一夜
 東山小跑。西山小跑。疲れ。其の。ぐ。喂も。養ハ。され。馬ん。ぞ。今
 日の用。小中。ん。也。且。あ。く。飽。まで。る。小。秣。を。飼。牙。後。山。を。下。く。青

州小回りもへ。秦明これを見て心中実中めと名ひ。思ふを
 安んじて坐を定め。又盃を奉る酒を酌るれ。五人の豪傑論番
 相勧め。酒闌小酌りも。秦明ハ疲と云殊更五人の豪傑小
 勸られ。就中大ハ爛解し。花榮自らこれを扶け
 帳中へ入。遂小宜しく歌ま。各同トく廳を出て。各己ガ
 房間を眠りも。初秦明ハ夜熟く睡り。翌日辰の刻ハ
 起る。山を下らんと欲し。諸將領小別れを告。宋江等再三
 留り。朝飯後小打立ると云れども。秦明ハ短氣の人なれば。
 決し。下と。頻り小辞し。褚の豪傑忙しく酒
 宴を設け。秦明を款待。衣甲軍器を取出し。これを
 還し。秦明遂小夜甲を着し。軍器を携げ五人の豪

傑小別れ。山を下り。宋江ハ五人の將領相送。山の麓小
 あり。則彼を小賊小牽せ。秦明小乗し。互小依り。一
 已に一別小及びり。秦明ハ小乗。独自自ら清凡山を
 離れ。亮が。青州小望。馳回り。徳十里許小あり。小
 已の刻の前後。秦明上小在。遙小對面を望。足小烟塵
 大ひ不起。一人小往來。秦明。是を疑ひ。恠と。
 遂小城外小。これ。此。原。救。百。間。の。人。家。あり
 何。一。宇。も。残。さ。悉。く。焼。尽。尚。且。斬。殺。され。る
 男女の屍瓦礫場の上小横へ。手幾何と云救を。秦明
 此跡を。大驚。忙。直。小。城。の。辺。あり。
 大音聲。門。を。叩。け。手。の。方。を。示。小。壕。に。架。と。

吊橋を高く拽起城中ハ都て旌旗砲石榑木ホを嚴密
 備へ若干の軍士衣甲の袖を連綿と充滿せり。秦明此光景を
 又々心中益々あつた。又々声あつて吊橋を下して我を
 渡せと云る。処ハ城中ハ一人の兵秦明を又々忙ハしく攻
 鼓を打つ大ハひ喊び鳴りしれ。秦明孩き我ハ是秦然管
 あり。何れも城内中ハ入れどし。野のどく躁動もあつた。處ハ
 慕容府尹城樓の上ハ躍りあつて大ハひ怒り罵る云汝反賊ハ我
 かく羞恥を知らざらぬ。汝昨夜多くの賊兵を引寄せ我ハ此
 城を攻餘多の百姓を殺し。若干の房屋を焼今又來る我を
 哄騙此城門を開くを。城中ハ攻入んとあつた。朝廷ハ汝を重く
 罰ハひ。それまで疎畧のつとめもあつた。

忘れ義を負く朝敵とをなり。我汝ハ後反のより帝ハ
 奏聞せん。今朝老子使者を都ハ我必も近く汝を
 捉へる骨を削肉を切んで天罰立處ハ我ハ知せん。秦明大ハ
 驚き普く罵れ。漸心を静め。又大音声ハ鳴つ云相公ハ
 誤ち多。某ハ是清風山の戦ハ打負五百の兵悉く賊徒ハ殺され
 某も終ハ活捉れ。山陣ハ在。寸歩ハ動さず。今朝一命を
 脱れ再び四りぬ。昨夜ハ某清風山ハ在。何れも此城を攻んや
 相公宜しく會議を加へ。府尹益怒る云我何れ汝ハ衣甲ハ
 軍器ホを減らざらんや。殊ハ城中の諸軍ハ又皆汝ハ賊兵を引寄せ
 人を殺し火を放つ。是を又届けぬ。汝此ハも程あつて抵難んや。汝
 實ハ戦ハハ敗れ。五百の兵の内何れ一人ハ逃回く

戦の動静を報るるものありし。汝が偽るることを是を以て知し。汝今又これ必死我を懸し城門を開き急を以て入り己が眷族を奪ひんと固く我豈汝が偽らざるや汝が妻子ハ我已これを殺せり。汝が全く信ぜざらんば汝が首を与へて置せしめんと。頼る軍士も命に彼妻子が首を鎗尖り刺り去りて挑げ申す。秦明も是を以て怒り。秦明ハ原短氣の勇士あれば妻子の首を以て忽ち怒り心頭より起り。睜眼ハ日月も異なり。此時府尹兵も下知して矢石雨のごとく投うけ射せられ。秦明敢て分説せしむ及ばず。急も矢石を避く。跑開き移城外を繞り此辺を足ふ。焰焼せし地面未と餘火消せ。煙の冷烟雨に起りぬ。秦明も於て心神大に撥乱し。只自害せんと欲ひて。再び舊路に

此せ。外十里をうろたひし。忽ち林の肉あり五人の大将。當先に進んで一彪の軍馬馳出ぬ。彼五人の大將ハ乃ち清風山に豪傑。宋江。花榮。燕順。王英。鄭天壽なり。相後も小賊。総て一三百も。宋江馬上に在りて秦明に對面し。則身を曲りて云々。総管何故青州の八岐らびりて。只一騎何國に往かぬや。秦明これを以て自ら怒り云々。奸賊の所為や。昨夜我が形を假して此青州城を攻め良民を殺し。房屋を焼き。刺へ我が妻子を。府尹が殺させぬ。我今家あれども奔りて。國あれども投がし。天に上らんと。これ路あり。地に入らんと。まはる門あり。我れ彼我が形を假し。奸賊らも尋ひ遇は。這狼牙棒を以て。骨を徹塵。小打碎き。方此這恨を雪ん。尚未ど彼賊らと分明。未知く。送憾

むれとて眼を怒らし牙を咬て罵り宋江此言をゆゑ又云くも
 夫人已不殺されぬあつて今更悲歎益あつて先固く怒り
 息め某自ら総管のあふ新く不嫌をせしやさん殺くハ総管
 我山陣のありあひく某が存念をも具しく笑ひ鬼も角も好む
 商賈をさしあつて再三強められ秦明をよも服し乃ち宋江等
 後ひて再び清風山にゆりゆく山亭の前ふりて下り諸豪傑
 齊しく山陣に入たり

綸者云此標目ハ夜瓦礫場を走ると云ふ秦明が似せ武者と思へば
 此似せ武者が瓦礫場となしつゝ実の秦明が走るとは翌日
 夜と云ふ叶は且秦明が五百の軍勢死もありさす水小瀬
 百六七十人の官軍山陣を生捉とわ此者さす酒肉を好むと云く

翌朝秦明青州へ馳ぬる時ハ後少人もあつて唯一人取りつゝハ此官軍ハ
 山陣に捨置つゝあや不審と云く且三國志ハ劉玄德の詞妻女ハ衣
 服のしと云ハ娶りつゝ毎ハ新ハ見ると云て落着を好む美にあつて
 秦明が妻府尹ハ殺されつゝ上ハ秋益あつて新不嫌せんよを情を捨
 詞ハ天下ハ名ノ豪傑の言結あつてつゝ

備後守三休右衛門

西又

河内三休孫兵衛

書林貧乏